

元グルカ兵探訪紀行 ——ポカラからペナンまで——

To Seek Gurkha Veterans in Nepal and Malaysia:
Journey from Pokhara to Penang

山本 勇次*

要 旨

本稿は、立命館大学・藤巻正己教授を代表とする文科省科学研究費海外調査研究「多民族国家マレーシアにおける外国人労働者に関する学際的総合的研究」（平成 24 ～ 26 年度）にかかわるフィールドワーク・レポートである。筆者は、本年（2013 年）3 月 1 日から 3 月 18 日までの間、元グルカ兵経営のネパール人労働者のマレーシア出稼人材業者を探訪し、5 人の業者に面接調査を実施した。今回は、あくまでも予備調査であったが、両国側の業者の間には、在ポカラ（ネパール）業者はネパール人労働者の募集担当、在ペナン（マレーシア）業者はマレーシアの職種紹介担当という役割分担があることが分かり、これら両者間には、労働者需要—出稼ぎ職種供給の連携プレイがあることが発見された。今後の調査では、このポカラとペナンにあるネパール人労働者人材業者間の連携関係をもっと具体的に調べてみたい。そして、そのような海外労働者の需給連携プレイが元グルカ兵の兵役仲間のネットワークとして汎アジアに広がっていることを実証してみたい。

*大阪国際大学名誉教授

Abstract

This is a fieldwork report to a joint-research project “Study of Foreign Workers in Malaysia” headed by Prof. Masami Fujimaki of Ritsumeikan University, which is sponsored with 2013 grant-in-aid from the Ministry of Education, Science and Culture. I conducted my preliminary fieldwork to Nepal and Malaysia from March 1st through March 18th, to search Pokhara and Penang for Gurkha ex-soldiers managing manpower agencies in both countries. As a result of the present fieldwork, I came to know the fact that those Gurkha veterans play a very important role to adjust Pokhara’s supply of foreign workers and Penang’s demand for them. A plausible hypothesis, that the division of roles and alliances between Nepalese manpower agencies and Malaysian counterpart, will be elucidated in my following field research.

キーワード：ポカラ、ペナン、元グルカ兵、外国人労働者、出稼ぎ人材業者

Key words : Pokhara, Penang, foreign worker, Gurkha veteran,

manpower agency

1. 調査目的と調査期間

本稿は、平成 24 年～ 26 年度文科省科研費海外調査である藤巻正己立命館大学教授代表の共同研究「多民族国家マレーシアにおける外国人労働者に関する学際的総合的研究」への調査報告書である。筆者は本共同研究班の分担研究者として「マレーシアのネパール人労働者に関する元グルカ兵コンネクション」を担当している。この調査課題は、2012 年 3 月に立命館大学人文科学研究所のマレーシア研究プロジェクト（藤巻正己教授代表）において、「マレーシアの国際観光地ペナン島におけるネパール人出稼ぎ労働者」の調査（Yamamoto 2012）をしたことより始まる。その調査により、マレーシアへのネパール人出稼ぎ労働者の送り出しと受け入れには元グルカ兵の「マンパ

ワー業者」が関与していることに気付いたのであった。そこで、今年度の科研費調査では、マンパワー業者に狙いを絞って2013年3月1日から3月18日までネパールのポカラとマレーシアのパナンでのフィールドワークを実行した。今回の調査は、あくまで次年度以降の研究調査の予備調査にすぎない。本稿では、今回のフィールドワークでの調査活動をフィールドノート風に時系列で総括してみたい。

<3月1日>

2月28日深夜に関西国際空港を出発した飛行機は、翌朝シンガポール空港に到着した。すぐに飛行機を乗り換えて、3月1日の午後にネパールのカトマンドゥ空港に到着した。ネパールに向かう飛行機の中で私の隣席にはネパール人女性が座っていた。そこで久しく使わなかったネパール語を練習したいという気持ちもあって彼女に語りかけた。彼女は既婚者で、御主人のオムリット・グルンはグルカ兵で現在ブルネイに駐屯中である。グルン夫人は身内の不幸で旦那を駐屯地に残して一人でネパールに一時帰国する最中であつた。彼女は、ご主人が一作年にはアフガニスタンに派遣されていたので、夫の身が心配でたまらなかったが、夫の派遣先がブルネイに変わってから一緒に住めるようになったのだと言う。グルカ兵は一年に三回休暇が貰えるが、休暇毎に夫婦でネパールへ帰国することは金銭的に無理なので里帰りするのはいつも彼女一人であるようだ。このグルン夫人とはカトマンドゥ空港に到着するとお別れしたが、後の連絡先として彼女は私に夫のEメールアドレスを教えてくれたのであつた。

カトマンドゥ空港からは、前もって連絡をしておいた旧知の大河原由紀子氏（在カトマンドゥ旅行者）の車で、彼女のオフィスに直行した。そこでネパール国内便のポカラ・カトマンドゥ間の往復航空チケットを手配してもらい、その後、彼女が手配してくれたロイヤル・シン・ホテルにチェックインした。やっと荷物をホテルに預けると、解放された気分になって五年ぶりの

懐かしいカトマンドゥを一人で気ままに歩き回った。

私がカトマンドゥを初めて訪れたのは、科研費でボカラの「カースト通婚」(Yamamoto 1983)を調査した30年余も昔のことである。それ以来十回以上カトマンドゥを訪れている。ネパールの首都カトマンドゥは盆地なので空気が滞留し、以前から車の廃棄ガスが目立っていた。それが現在は自動車等の交通量の著しい増加で、廃棄ガスの悪影響が一段と悪化している。交通量増加に連れて交通ルールや運転マナーの向上が進むどころか、逆に悪化しているようだ。私はネパールで自家用車を運転していた頃があった。その頃欧米留学経験者のネパール人によく言われたものだ。「日本と違ってネパールでは、車で人をひき殺しても金を払って示談で済むが、牛を轢き殺したら刑務所行だよ。」ネパールの人口80%がヒンドゥー教徒で、ヒンドゥー教では神様の牛は人よりも上位にある。現在もネパールの目抜き通りでは、巨体の割には痩せている牛が、口をモグモグ擦りあわせ反芻行動をしながら、堂々と大通りの真ん中に横たわっている。人々はそんな牛達の交通妨害に文句も言わずに、車のスピードを落とし牛に衝突しないよう迂回しているのである。

拙稿(山本1997)にも詳しいが、1980年当時、名君ビレンドラ国王がネパールの「Zone of Peace」宣言をした。この宣言は、中国とインドというアジア二大強国に挟まれた緩衝地国家ネパールがいずれにも政治的に偏向しない意志、同時にスイスを模範とする永世中立の国是を表明している。それによりネパールは、今後「観光立国」を目指す国家たることを国際社会に表明したのだ。たしかにネパールには、タライ平原(インド国境沿いの平野)の木材やジュート麻の他には輸出するものがない。ネパールの観光立国は、世界最高峰のエベレストとヒマラヤ連峰のパノラマとその牧歌的風景を売り物に、豊かな先進国社会の喧騒に疲れがちな人々が「癒しの旅」に来てもらうほかに外貨を稼ぐ方法がない。しかし長年ネパールを観察してきて筆者には、観光立国にも関わらず、この首都の環境劣化はネパール政府の行政がうまく機能しないことを物語っているだろう。

< 3月2日 >

シャングリラ・ツアー社の送迎車でホテルから空港へ向かい、飛行機でポカラへ向かう。5年前、ポカラ便片道航空料金は60 \$だった。現在では115 \$になっている。しかし飛行機なら30分余のところを、長距離バスなら6時間から8時間もかかってしまう。私は前からポカラへは飛行機で行くことにしており、ブッダ・エアー（Buddha Air）の航空券を購入していた。国有企業ロイヤル・ネパール航空のカナダ製中古機ツイン・ロッターよりも、私企業ブッダ・エアー社の新しい飛行機に乗る方が安全なのである。以前にも旅行会社の人から聞いた話では、ロイヤル・ネパール航空の社員採用人事は公務員同然の「ネポティズム」が多く、そのせいでロイヤル・ネパール航空はお役所並みのやる気のない仕事ぶりで、エンジン整備が行き届かない心配があると言う。確かにロイヤル・ネパールは発着時間が頻繁に変更されるし、客サービスも愛想が良くない。その点、グルン族（グルカ兵出身者のトライブで仏教徒が多い）の金持ち連中が共同出資し創設したブッダ・エアーは、飛行機自体が新しく、エンジン等の補修整備も確実で、発着時刻も正確である。航空料金は、両社にほとんど差がないのだが・・・。

8千メートル級の冠雪を抱いたヒマラヤ連峰を眺めるフライトは、世界でも有数の観光スポットであることは間違いない。しかし飛行機の右側か、左側に座るかで、ヒマラヤ眺望の可否は決まってくる。もしヒマラヤを見たいなら、ポカラ行なら右側に、帰りの便には左側に座席を確保すべきだ。ただしこの空路は、ベンガル湾から吹きつける風がヒマラヤの壁にぶつかって絶えず乱気流をひき起こしている難所でもあることも知っておく必要がある。乱気流のエアー・スポットに落ち込むと、たかだか定員20名程度の小型機は急激に落下する。ブランコが最上位の地点から最下位まで落ちる際の落下感が、その何十倍の激しさと十秒以上の時間で継続する「墜落感」に慣れなければならない。シートベルトをすれば怪我もしないし、飛行機が墜落することもないはずだ。しかし、急激な落下感が嫌で、この空路の飛行機には乗

ろうとしない観光客も決して少なくないのである。

野原に滑走路だけのボカラ空港は、昔と殆ど変わらない。乗客用の待合室は新築され、その土産物コーナーが改装されていた。30 年余前に私がボカラの「カースト通婚」(Yamamoto 1983) の調査をした際の現地調査助手の一人であったクリシュナ・パラジュリ君は、このボカラ空港の土産物屋店主となっている。学生時代は痩せ形で背のひよろ長い男子だったが、今ではポツェリ太って「サウジ (sauji)」(店主) の貫録が出てきた。五年前にも再会していたので、我々は立ち話で再会を喜びあった。そして空港前でタクシーを拾ってフェワ湖のダムサイドにあるドラゴン・ホテルへ向かったのである。ホテルに到着するとオーナーのトラチャン夫人が出てきて、私を歓迎してくれた。彼女の顔を見ると、彼女特製のタカリ風チキン・カレーの濃厚な味を思い出して、まだ夕方には早かったが、夕食には彼女のチキン・カレーを出してくれるように頼んだのであった。

< 3 月 3 日 >

ボカラ名物「マチャプチャレ」(「魚の尻尾」と呼ばれる名山) の朝焼けの余韻を楽しみながら食堂でコーヒーを飲んでいると、昨日は遠方に外出していた顔を見せなかった主人のハリー・ドージ・トラチャンが出てきた。「おはようございます!」と彼の話せる数少ない日本語であった。このドラゴン・ホテルは、私が初めてネパールへ海外調査で来た時に、同行の京大時代の恩師・飯島茂先生に連れられてボカラで泊まった最初のホテルである。それ以来、ドラゴン・ホテルはボカラでの私の定宿となっている。前著 (山本 1997) でも紹介したが、タカリ族生まれのトラチャンは、若い頃にチベット僧となる仏門修行をしていた。1959 年に中国軍のチベット侵攻が始まると、大勢のチベット難民がネパールへ逃れてきた。トラチャンもチベット国境に住んでいたタカリ族の人々と一緒にボカラへ移住してきたのである。彼はタカリ族の有力者の娘と結婚して、義父の土地 (現在ドラゴン・ホテルがある場所)

にチベット時代に習った薬草療法の診察所を開業したのである。

ポカラ観光産業の発達は、拙稿（山本 2008）に述べたが、若干ここでも触れておきたい。ヒマラヤのタコールからポカラへの道は更にインド国境バイラワへと続いて、古くからチベットとインド間の「塩の道」と呼ばれていた。チベットの豊富な岩塩（太古チベットは海の底でヒマラヤの隆起で現在のチベット高原となる）があり、その岩塩をロバに背負わせてインドに行く交易街道である。その街道の途中にあるポカラは、ロバ行商隊の中継基地として栄えてきた。この塩貿易は、当時のネパール国王がタカリ族に専売特許を与えたものであり、タカリ族はこの塩貿易の利潤を「原資」として蓄え、後にポカラだけでなく、カトマンドゥやインド国境のバイラワなどネパール各地で商売を始めるに至った。ネパールの観光産業が開始される 1960 年代中頃には、この塩街道は「アナプーナ街道」と呼ばれ、この街道の所々にはタカリ女性が経営する「バッティ (bhatti)」（一膳飯屋兼簡易宿）が点在するようになった。タカリ商人の興隆には、彼ら一族で運営する「バクティ (bakuti)」と呼ばれる商売資金の頼母子講が貢献したと言われている。

ネパールに現存するカースト制度に関しては、拙稿（Yamamoto 1983）に詳しい。ネパールのカースト制度は、「バフン (Bahun)」、「チェットリ (Chhetri)」、「マトワリ (Matwari)」、「ナチュネ (Nachhune)」の四階級がある。このカースト制度の原型は、グルカ朝の宰相ジャン・バハドール・ラナ (Jan Bahador Rana) が 1854 年に制定したネパール最初の成文法「ムルキ・アイン (Murki Ain)」により国家権力で導入された「ヴァルナ (Varna) 制度」に由来する。「ヴァルナ (Varna)」とは「(肌の) 色」を意味するペルシャ語で、「ヴァルナ制度」とは紀元前 10 世紀頃からイラン高原から北インドに進出してきた「アーリヤ (Ariya: 貴い人)」と自称する民族がインド原住民のドラヴィダ系諸種族を武力征覇して上に作られた「肌の相違に応じた身分社会制度（古代漢語文献では「四姓制度」）であり、「バラモン (Baramon)」、「クシャトリヤ (Kshatrya)」、「ヴァイシャ (Vaisha)」、「シュードラ (Shudra)」

の四階級で成立していた。ヴァルナ制度の成立は、「アーリア人」の少数支配民族が遥かに多数人口のドラヴィダ系被支配者層を武力統治だけの支配を補強するために、支配の正当性を被支配者層自身に納得させるためのイデオロギー装置が「バラモン教」と「ヴァルナ制度」だったのである。

拙稿（山本 1983）にあるように、現在のネパールのカースト制度にある中位階級「マトワリ（Matwari）」には若干の説明が必要であろう。もともと「マトワリ」とは、「酒飲みカースト（alcohol-taking castes）」を意味していた。暑い北インドからヒマラヤに移住した上級カースト群（バフンとチェットリ）は、本来、アルコール類を「不浄の飲物」として摂取しなかった。ブラーマン（バフン）は、「浄（choko）」を最高価値として「汚猥、不浄（juto）」を厳しく避ける習性があり、「心、理性（mind）」の明清を最もよしとして猥雑・汚濁を避けようとしたのである。だから酒を飲んで酔っ払い、頭の正常性を喪失することを嫌った。そんなブラーマン・クシャトリヤがヒマラヤに来てみると、ヒマラヤ山麓の先住民であるモンゴロイド系諸種族は、高地の寒さに体内で暖を取るため日常的に飲酒をしていた。それでブラーマンやチェットリはモンゴロイド系ヒマラヤ原住民達を「マトワリ（酒飲みカースト）」と総称するようになったのである。

私の昨年度のマレーシア調査報告論文（Yamamoto 2012）でも述べたが、マレーシア（ペナン）に来ているネパール人出稼ぎ労働者の殆どが「マトワリ」出身である。この傾向は、現在のネパールでもマトワリは最下層の「ナチュネ（アンタッチャブル）」ほどではないにしても、上級カーストのバフンやチェットリに比べると社会的に差別されている状況への対抗策である。マトワリ青年達はバフン・チェットリのネポティズムで公務員職から排斥され、観光立国ネパールでは多量の労働者を吸収する主産業がないから、ネパールでは望ましい就職口を探しだせない。それ故彼らはマレーシアなど外国での出稼ぎに傾倒する。これには、グルカ兵の海外出稼ぎ者が先例となることは言うまでもない。

ポカラの観光産業化が進むと、ヒマラヤの景観を近場で望みながらトレッキングを楽しめるアナプルナ街道は、世界観光客の知れ渡るところとなった。物質的には豊かだが煩雑な都会を逃れて自然に癒される趣向を持つ日本人もアナプルナ街道出発地のポカラに押し寄せるようになった。日本の旅行業者は、日本人観光客にポカラの最高級ホテルをあてがうのが常であるが、ちょっと「ポカラ通」を自称する人々は、料理のうまさ、オーナーの人間的魅力に魅かれて、ドラゴン・ホテルを定宿とするようになる。このようなドラゴン・ホテルを定宿とする日本人登山愛好家とトラチャン達タカリ族有志との間で、ネパールの「タコーラ」と長野県の「利賀村」が景観上よく似ているから「国際提携」の縁組で結びつけようとするファン達も増えてきた。そして20年近く前この国際提携は実現に至った。この時トラチャンはタカリ族代表で調印式に出席のため初めて長野県を訪れたのである。

トラチャンと私との付き合いは、1982年以來だから既に四半世紀以上になる。今回五年ぶりでドラゴン・ホテルに到着した翌日、彼は私を中古のミニ・バンに乗せて現在建築中のリゾート農園マンションの建設現場に連れて行ってくれた。そこはまだ電気も来ていないが、既に自家用発電装置も具備し、宿舎や食堂や風呂場、従業員宿舎もほぼ出来上がっていた。そのリゾート型農園は、コシヒカリ栽培予定の田んぼ、種々の果物、薬草・薬味を育てる畑が山の中腹あたりまで続いている。ポカラ産のコーヒーも収穫できる予定だ。彼の計画では、この農園へ毎日ヒマラヤを仰ぎながら農園作業で汗を流しながら長期滞在を楽しむ日欧米からの観光客を呼びこもうとするらしい。ツーリズム学で「エコ・ツーリズム」と呼ぶ新傾向をトラチャン氏は既に実践しているのである。

<3月4日>

今朝はベッドから窓を通じて見えるヒマラヤを仰いだ後、勢いよくシャワーを浴びた。このシャワーが、ほどよい熱さのお湯が十分に出ることが嬉

しかった。ヒマラヤの三月はまだ朝晩厳しく冷え込む。シャワーが冷水しか出ないなら、湯を沸かしてもらってタオルで体を拭くしかない。30年前の昔はまだポカラの電気事情が極端に悪く、ホット・シャワーなどは夢の話であった。しかしその頃既にトラチャンは、ドラゴン・ホテル全室でホット・シャワーが利用できる試みをした。彼は政府から低利子長期ローンを借りて、ホテルの屋上にソーラー・システムを設置したのだ。そのソーラー・システムは今もまだ稼働しており、朝晩のホット・シャワーを楽しませてくれている。

前の論文（山本 1998）に詳しいが、ネパールの役人にはバフンとチェットリが多い。彼らは結婚するまでに「ゲル」（ヒンドゥー教教師）に師事しヒンドゥー教の基本的規範を学習させられる。そのような学習期を経て、自分の両親から生まれた彼らは、ゲルという宗教上の父親により「生まれ変わり」、そしてヒンドゥー教徒として「大人」になり結婚する資格を与えられる。だからバフン・チェットリ達は「タガダリ（再生族）」と呼ばれている。タガダリは、綿糸を撚った「ジャンアイ（janai）」（聖紐）を一生涯常に身に帯びなければならないし、それ故、この聖紐は彼らの清浄カースト性を象徴するものとなる。

バフン・チェットリの社会行動は、ネパールを長期支配してきた特権階級として「ネボティズム（nepotism）」（身内親族最優先）や「収賄」など物欲的特権も目立っている。公職規範の順守意識が脆弱なのであろう。そんなタガダリ役人をマトワリ実業家は上手に利用する。トラチャンもそうである。彼は国王の誕生日とか、祝祭日とかに自分のホテルで大パーティーを開いて、ポカラでの重要な、接待されること大好き役人達をもてなすことに長けている。そのパーティーでは、ホテルの中庭にバーベキューの宴席を並べ、白いクッキング服とシェフ帽で正装したコックがどんどん牛肉以外の肉を焼き、（大好評なのは日本料理の「チキン・テリヤキ」）、横にはワイン・バーがあって、ワイン、ビール、スコッチ、日本酒までが揃っている。ナンもあるし、

焼きソバ、チャーハン、タカリのダル・パートもある。こんなパーティーに招かれた役人達は、「ドラゴンの食事がうまい」と実感し、そのことを彼らの友達や知り合いにクチコミで伝える。だからパーティー費用は宣伝効果への投資でもあろう。また同時に、ただ飯好きの役人達と「コネ」を作る機会にもなり、他日その役人との「ラポール」は、観光推進事業費などの公的資金を長期低利ローンで確保できる見かえりが期待できるかもしれない。

昼食後ホテルの屋上でヒマラヤの眺望を楽しんでいると、昨晚電話したミン・パハドール・ギリ氏がロビーに来てくれた。ミンさんは1982年のカースト通婚調査で調査助手として働いてくれた学生の一人である。私はミンさんの素朴で純情な人柄が大好きで、それ以降もポカラに来るたび彼に色々の調査を手伝ってもらった。ミンさんも既に50歳代半ばになり、この日も彼のインド製ホンダ・ヒーロー（125CC エンジンのバイク）に私を乗せて、彼の家に昼食に連れて行ってくれた。既に昼食を済ませたので空腹ではなかったが、それでも彼の接待を断るべき理由は何もない。（ネパール人の友人達との共食儀礼に頻繁に付き合うので、私はネパールに来るたびに太って帰国することになる。これは、フィールドワーカーの職業的悩みであろう。）ミンさんの家は、ポカラの南郊のガンダキ川の傍にある農家である。半メートル程の石垣が周囲を囲み、野放しの牛が入り込まないための竹竿の遮断機を開けると、マンゴーや桃やバナナの木々がある中庭に入っていける。彼はその庭で野菜を自給自足し、水牛二頭を飼っている。雌の水牛は出産後三年以内牛乳より脂肪分の濃厚なミルクを毎朝提供してくれるし、雄の水牛は田起こしや畑の畔作りの動力として、水牛を所有しない農家に貸し出して賃金を稼いでくれる。

ミンさんの職業は自称「ソーシャル・ワーカー」で、近隣住民の諸問題をいろいろと訊いて解決してやり、時には村人の市・区役所との掛け合いの手助けもしてやる。言わば、ポカラの二宮尊徳、宮沢賢治である。だが仕事が忙しいわりには、余り金にはならない。そんなソーシャル・ワーカーの旦那

を助けるべく、彼のウィフは自宅の道路脇に小さな雑貨店を営んでいる。この店の道路を挟んだ対面には、ミンの実兄が経営する「ヒマラヤ・ボーディング・スクール」がある。「Boarding School」とは、文字通りなら「寄宿舎学校」なのだが、この学校には一つも寄宿舎がない。ネパールでは、小学校から高校まで連続上昇するエスカレーター方式の私立学校を「ボーディング・スクール」と呼び、その売り物は「英語」に強い教育なのだ。長兄のボーディング・スクールがどの程度の英語教育かを私は知らない。しかし、小学生から高校生まで 100 人近い男子児童生徒が集まっているのだから、経営が順調なことは間違いない。だからこの学校のちょうど前にあるミン夫人の雑貨店は、始業前や放課後に飲物やお菓子類を買いに来る男子生徒達で繁盛している。従って、ミンさんは左団扇で人助けに傾倒できる果報者なのである。実際ミンさんは近隣の人々にとても尊敬されている。それが証拠に、15 年前に彼はポカラ市 16 区の区長選挙に当選したのだ。その 3 年任期終了後に彼は再選を期して健闘したが、惜しくも落選した。その時の当選者は、この地域随一の金満建設業者で、田中角栄にも似て、金をばらまいて得票を獲得した「選挙違反候補」だったのである。勿論、ネパールではこの種の選挙違反は日常茶飯事で、何ら取り締まられることはない。ポカラの経済発展は、1996 年 2 月から始まったマオイストの「人民戦争」以来まだ続いているが、その遅れと並行して、ポカラの真の「民主化」もまだまだ遠い先ようである。

< 3 月 5 日 >

午前中に、旧知の元グルカ兵ラム・バハドール・グルン氏を訪問する。彼はグルカ兵時代に鍛えられた英語力を利用して、トリブバン大学の近くで英語学校を経営している。彼は英国陸軍の「大尉（キャプテン）」であった。それは彼の誇りであり、それだけに彼の英語は、堂々のブリティッシュ・イングリッシュである。しかし気位の高い彼の性格からか、期待したほどにポカ

ラ在住の元グルカ兵との付き合いはない。軍隊時代の上官一下士官一兵士の階級序列は、除隊後も永く存続するものだと私は思っていたが、駐屯地内の階級意識は、実際の戦場体験で培った「戦友意識」とは異なるものらしい。同氏は英国で基地駐在中のキャプテンであったが、実戦をまったく経験しておらず、キャプテンとして自分の部下を一度も実戦で指揮したことはなかった。だからなのであろう英国からネパールに帰国後もグルカ兵時代の部下とはあまり交友しなかった。

グルン氏の唯一の紹介は、ケン・バハドール・プン氏だった。プン氏は、マガール族（勿論マトワリ）で、ポカラの目抜き通りマヘンドラプールの一角で「FLORID Human Resources Pvt. Ltd.」を開業していた。さすがポカラ第一の繁華街だけに多くの商店群がひしめき合い、彼の事務所を探すのに一時間近くを浪費してしまった。大通りから見て二階建築物の隙間に細い階段があり、その階段を登って建物裏側にある二階通路を進むと、彼の会社名が書かれた小さい看板があった。何でもっと堂々と大きな看板を出さないのだろうか、と不思議に思った。後にポカラやカトマンドゥでマンパワー・エイジェンシーのオフィスを5軒訪れたが、それらには共通点が三つある。第一に、オフィスの看板が「恥ずかしそう」で探すのに困るほど目立たない。第二に、全てのマンパワー・オフィスが二階にあり、しかも大通り裏側の二階通路を通してオフィスに辿り着ける所にある。第三に、それらのオフィスのボス達は色眼鏡こそ架けていないが、眼光鋭い、でっぷり太った、「大将」タイプが多い。マンパワー・エイジェンシーは合法的なビジネスであるが、この「ひっそりさ」、「うしろめたさ」は何故なのか？私は今後その理由を解明したいと思う。

私の知る限り、ネパールの人材派遣会社の社長（ボス）はミドルネームに「バハドール」を必ず持っている。「バハドール（Bahador）」とは「勇者」を意味するネパール語で、ネパール軍隊で今も昔も主勢力であるチェットリやマトワリの男性達の殆どが「バハドール」名を持っている。時たまアンタッ

チャブル男性にもバハドールを名乗る者もいるが、余り多くはない。最上級のバフン（ブラーマン）男性にはバハドールを名乗る者は皆無である。私の名前は「勇次」なので、ネパール語で自己を名乗るときには、いつも「バハドール」を使っている。私の体格や外貌がグルン男性とよく似ているからネパール人の友人達は、私を「ヤム・バハドール・グルン」と呼ぶ。ここで「ヤム」とは私の姓「山本」の略称だが、同時にネパール語で「ヤム（Yam）」とは「閻魔大王」を指すから、ネパール人は私の名前から「地獄の番人」のオーラを感じているのかもしれない。

ケン・バハドール・プンさんによれば、ポカラの青年達は、グルカ兵やシンガポール警察を第一に目指すが、その選抜試験が今や非常に難しくなっている。たしか数年前英国政府はグルカ兵の待遇を英国兵と対等になるよう引き上げた。また6年以上グルカ兵勤務した除隊者には、英国在留資格をも認めるようになった。それで多くのグルカ兵達は子供の教育上の有利さもあって、故国へ帰らず英国残留を希望する者が増えているとのことである。このグルカ兵の待遇向上が、ネパール青年のグルカ兵応募者を急増させている。

グルカ兵となることが困難だと断念したネパールの若者達は、それ以外の方法で海外に出ることを目指す。そんな彼らが向かうのが海外での出稼ぎ労働者なのだ。ポカラだけでも海外での出稼ぎ労働を紹介するマンパワー・エージェンシーが10社以上ある。それらを通じてネパール青年は、マレーシア、シンガポール、香港、インドなど旧大英帝国圏内に海外労働者として送りだされるのである。ここ数年はアラブ諸国での出稼ぎ労働者に行きたがる傾向が強く、最近では毎月30人以上がポカラから出かけると言う。特に先月はアブダビ一国だけでも90人の派遣者が出たそうだ。そのような海外出稼ぎ者は①18歳以上35歳以下の青年で、②英語力があり、③メディカル・チェックの合格者が要件となる。マンパワー業者は、彼らの海外での具体的な就職口の紹介、そのための出入国旅券の確保、そして航空券の発注などを代行してやり、その手数料を取る。場合によっては、準備金がまったくない

青年には、海外出国手続き代行料金に海外渡航費を含めて、1 ラック（10 万 NRs（20 万円弱）近い金額のローンを出してやることもある。近年では、上記三要件を満たした候補者を対象に、マレーシアの面接試験官がポカラにまで定期的に訪れるのだと言う。このことはマレーシアなどの出稼ぎ労働者受け入れ国が、恐らく、より質のいい海外労働者を確保するために、ネパールにまで直接押し掛けてくる時代になったのだという傾向を示唆している。ペナンの中国人系経営者の話では、ネパールからの労働者は勤勉で、余り自己主張をせず、雇用者に比較的従順なので、雇用者サイドから言えば、使いやすい労働者であると言う。それに比べて、バングラデッシュやインドネシアからの労働者は、ネパール人やビルマ人に比べると、劣悪であると言う。

< 3 月 6 日 >

グルカ兵志望のネパール人青年を対象に、ポカラ中心部のチャイニーズ・ブリッジ（中国の無償援助で建築されたコンクリート橋）近くに、「TASK FORCE NEPAL」というネパール政府公認の海外労働応募者の訓練施設が開設されていた。この訓練所は、表向きはグルカ兵選抜試験準備の「私立予備校」であったが、内実は、グルカ兵選抜試験には通りそうもないので断念して、その他の職種の海外派遣労働を確保できるための競争力を向上するための訓練所である。この訓練所で使用されている「グルカ兵採用テスト」の試験問題集をもらって、後に自分で試みてみたが、そこには英語と数学の問題があり、私の場合英語は易さしいと感じたが、高校時代に得意であった数学は私もできない難問が多かった。そんな数学でも合格者は60%の正答率を取るというので驚いた。

午後には、午前中に訪れた「TASK FORCE NEPAL」の付近にある「MRR Manpower 社」を訪問してみた。ここは、ネパール政府登録済の海外出稼ぎ労働者用マンパワー業者である。勿論、ここも英国グルカ兵やシンガポール警察軍への派遣を目的とする人材派遣業者であるとの「謳い文句」は吹聴さ

れており、その選抜試験の予備校とも言える。英語や数学を主要科目に、その他の選抜試験の必須科目が一通り揃えてある。しかし実際には、そのような選抜試験には通りそうもないネパール人青年相手に「初歩的な英会話能力」を学習できるように「デヴァナガリ文字」（ネパール語、ヒンディー語筆記文字）で解説された英会話教科書を教材として使用している。つまりここは、ネパール青年の海外出稼ぎ労働者としての競争力をつけるための人材養成訓練学校なのである。

夕方近く「TASK FORCE NEPAL」本部で教えられてボカラ第一区のビンド橋近くに最近出来た「グルカ兵博物館（Gurkha Museum）」に出かけてみた。そこでは、グルカ兵が誕生した当初の制服や戦闘服の実物が陳列されており、歴代のグルカ兵たちの写真が通史的に展示されており、ぐらりと回覧するとグルカ兵の誕生形成史を視覚的に見られるように陳列されている。この会場の土産物売場で『Gurkha Military Text Book』を記念に購入した。この教科書は先述した「TASK FORCE NEPAL」などで使用されているグルカ兵の実戦訓練用のテキストで、余りハイテク武器を使用しない基本的な歩兵部隊用の戦闘訓練を教えるものである。この種の教材を私はこれまで見たことがなかったので、著しく知的興味を刺激されたのである。

< 3月7日 >

ボカラからカトマンドゥへ空路で帰ってきた。飛行機は左側の座席を取ったのだが、雲か霞かヒマラヤははっきり見えなかった。カトマンドゥ空港からタクシーでロイヤル・シン・ホテルに再び宿を取った。午後遅くに、旧知のパーシュラム・クンワール・チュトリ氏と再会した。パーシュラムさんは、ミンさん同様に私がボカラで実施したカースト通婚調査での多人数の学生調査助手の一人である。しかも彼はその時採用した大勢の学生達の代表的存在であった。今でも私は記念にとってあるが、彼が記録してくれた調査データとその集計計算票は実に見事な出来栄である。まだコンピュータが大量

の入力データを記録カードにパンチングして入力する大型計算機しかなく、今のようには携帯に便利な小型ラップトップを鞆に入れてフィールドワークに持ちこめることが出来なかった時代である。パーシュラムはカシオ電卓一本で、全データを集計し基礎的な統計指数を計算してくれた。

その当時、彼はボカラの大学を卒業すると、カトマンドゥへ上京したいという強い希望を持っていた。それで私はネワール人（カトマンドゥ盆地の原住民）の友人のスバルナさんに頼み込んで、彼の一族が経営するパタン（カトマンドゥの隣町）の家具工場に事務員として雇用してもらった。パーシュラムさんは、そのパタンでの就職を契機にして、やがて中学校教員の職を見つけて事務員から教員職に転職して、同時に市内中心部にあるトリブバン大学経営学部修士課程を卒業したのである。修士号を取得した後に彼は銀行関係に就職し、そして彼本来の能力を発揮して、在カトマンドゥのオーストラリア系外資銀行に雇われ、ついには雇われ頭取にまで出世した努力家なのである。今では銀行を引退し、経営コンサルタントとして独立営業をし、カトマンドゥ中を自家用車で走り回っている。彼はカトマンドゥ空港に近いところに瀟洒な三階建の家を持っており、私も何度か泊らせてもらったことがある。しかし今回は滞在時間も短いので、彼とはカトマンドゥ市内で夕食をともにして、日本からの土産を彼に手渡した。その帰路彼の車で送ってもらおうと、ついでだからと彼はやや強引に彼の家に私を連れて行ってくれた。彼の女房殿はお元気で、前よりも太った感じ。（インド同様にネパールの富裕層の夫人達は、家事全般を雇用人に任せるから体を動かして働くことがなく、豊かな中年女性となることが多い。）彼の3人の娘さんは既に独立しており、奥さんが準備してくれたお茶だけを頂戴しながら昔話をした後に、再度、彼の車でホテルまで送ってもらった。

< 3月8日 >

午前中にボカラで聞いた情報をもとに、カトマンドゥのマヘンドラプール

にある「TASK FORCE NEPAL」の本部を訪ねてみた。残念ながら、面談しなかったハルカ・バハドール・グルン所長は欧州出張中とのことで不在であった。その事務職員の話では、グルン所長は、絶えず世界中を旅行しまわっており、「TASK FORCE NEPAL」の卒業生を送り込む目的で海外の傭兵・セキュリティガードなどの就職先を開拓するために動き回っているらしい。事務職員にいろいろな質問を聞いてみたが、もう一つ要領を得なかった。次回のネパール調査では、ここを重点的に聞き取りしてみたい。

在ネパールの日本人友人たちと会食した際、彼らはカトマンドゥ在住の日本人の視点から現在のネパールの政治情勢を色々話してくれた。私の前稿(山本 2000)に述べられているが、ネパールの政治変革は 1996 年 2 月に始まった「マオイスト (Maoist)」を自称する共産主義ゲリラ集団が「人民戦争 (People's war)」を始めだした頃から起こりだす。その当時よく使われた「マオバディ (Maobadi) : マオイスト」と対比する言葉として「カウバディ (kaubadi) : 公金を蚕食する人々」というネパール語があった。マオバディはカウバディを一掃するために、人民戦争を始めたのである。最初は微々たる勢力だったが、長年の政府役人の汚職体質が一向に治らない現状に失望した人々は、ネパール人民が貧困から脱却できないのは、国王やその取り巻きの閣僚達が国庫資産を蚕食しているからだとのマオイストの主張にだんだん共鳴するようになっていったのである。

その頃、国王ビレンドラはマオイストを取り締まるために警察軍を使用していたが、優勢になりつつあるマオイスト・ゲリラは方々で警察軍を翻弄するようになっていく。そこでビレンドラ国王の弟ギャネンドラは、警察軍よりも戦闘力がある最新兵器を持つネパール国軍をマオイスト鎮圧に投入するように兄ギャネンドラに上奏した。しかし同じネパール人同士の内戦勃発を嫌ってビレンドラは弟の意見を受け入れなかった。2001 年 6 月に、王宮でビレンドラ国王一族の惨殺事件が起こった。巷の噂では、当時も今も、弟のギャネンドラが影となって実行した宮廷クーデターだったと言われている。

その噂の真偽は検証されることなく、一週間後にギャネンドラが王位を継承する運びとなったのである。

ギャネンドラは王座に就くと、同年 11 月にはネパール全土に非常事態宣言を布告し、マオイスト掃討にネパール国軍を使いだした。また米国から M1 ライフルを 2 万丁購入するための軍資金を調達するため宮廷費をいきなり 6 倍に急増させた。しかもその予算急増の方法は議会的手続きを無視した独裁的手法で強行したので、殆どの議会勢力は反ギャネンドラに傾いて行った。ネパール国軍兵士達も反ギャネンドラ志向が濃厚で、マオイストとの戦闘に積極的に参加する意思がなかったのも、マオイストの武力支配は殆どネパール中に蔓延するに至り、やがて首都カトマンドゥを包囲して議会勢力にまで影響力を行使するに至ったのである。そして 2006 年についにネパール国王を追い出して、ネパール王国はネパール共和国へと国体そのものが変わってしまったのである。この間のマオイストと警察軍との抗争は、観光立国ネパールの観光産業にとって大きな阻害要因となった。このネパール国政の不安定化とそれによる観光産業の低迷化に応じてネパールに日本人観光客は来なくなったし、またネパールに残留し仕事をしていた日本人も多く帰国してしまった。現在はネパールの観光産業は回復期に向かいつつあるが、一旦帰国してしまった日本人達はすぐにネパールに戻ってはいない。

< 3 月 9 日 >

朝カトマンドゥを出発して、マレーシアの首都クアラルンプール経由で、やっと夕方ペナンに到着した。ネパールでは方々歩き回ったことで予想外に疲れており、うっかりと乗り継ぎの飛行機に搭乗できなくなった。それで急遽旅程を変更する想定外の出来事も体験したので、ペナンに到着した後は再度 B-Suite Hotel に宿をとって休養に励んだ。結局ここに 3 泊（3 月 9 ～ 11 日）した。しかし残念ながら、私の部屋のホット・シャワーが冷水のみでお湯が出ない。あのポカラのドラゴン・ホテルでも熱湯が出るのに、ドラゴン・

ホテルの宿泊料金より 10 倍も高いホテルでお湯が出ないことにショックを受けた。マネージャーに部屋の変更を申し入れしばらく辛抱していたが、事態が好転しなかったので、ついにホテルを変更したのである。

ホテルの自室ではラップトップを開いて、フィールドノートを記録した。私は、日中はポケットに入る手帳に観察したこと、聞き取りしたことをメモっておいて、それを夕食後にホテルでラップトップに整理しながら記録するようにしている。この整理も昔は、現場で「京大式カード」に書き込み、それを「一行ラベル」を付け加えて「リレーショナル・データベース」（例えば MS-Access など）に打ち込んでいた。これだと、フィールドワーク終了後に調査報告論文を書く際に検索機能を利用して、効率よく論文が書けることは間違いない。しかし私がだんだんとフィールドワーカーとして慣れてくると、調査メモを参照して京大式カードに整理した後に、更にそれらをデータベース型のコンピュータに入力する時間がだんだん煩わしくなってきた。この簡略化を自分自身ではフィールドワーカーとしてのベテラン意識で補いながら、フィールドのメモ手帳から直接にコンピュータに日記形式で文章入力する方式に切り替えてしまったのである。換言すれば、私はある年齢を境に、自分のフィールドワークのデータをコンピュータ内に自分専用の「データベース」として構築する意図を放棄してしまったのである。今では残念でたまらない。

< 3 月 10 日 >

B-Suite Hotel 滞在中、前年の調査でネパール人労働者多数が発見されたホワイト・コーヒー店や百盛百貨店内の本屋を再訪してみた。そこには昨年まで働いていた旧知のネパール人はもはや働いてはいなかった。彼らは既に帰国してしまい、それぞれの職場には新しいネパール人が補充されていた。せっかく前年度の調査期間中に構築したネパール人労働者とのラポール (rapport) を今回の調査には活かせなくなり、今回の調査期間の短さを思う

焦燥感も加わって、落ち込んでしまった。気を持ち直し双六の振出に戻ったつもりで、百盛百貨店内のホワイト・コーヒー店へまた出かけなおして、その時に私の注文を取りに来てくれたネパール人のウェーターに話しかけた。ネパール語で彼の名前と年を聞いた。彼は20歳で、ラム・バハドール・ライだと答えてくれた。(ライも「マトワリ」カーストである。)私は彼にネパール語で簡単な自己紹介を済ませて、彼のペナンでの生活について話を聞かせてもらいたいと頼んでみた。彼は少し躊躇いながら「いいよ」と答えてくれたので、彼の仕事が終わった後に再会すべき場所と時間を打ち合わせて、私は、とりあえず、その店を後にした。彼が余り長く特定の客としゃべっていると、後で彼のボス(大柄なマレーシア人中年女性)に叱られるのが可哀そうだからと気を遣ったのである。しかし今から思えば、それが裏目に出てしまったのであったが・・・。

昨年度の調査経験でもそうであったが、これまでマレーシアで会ったネパール人とは比較的簡単に友達になることができた。それは、彼らが、初対面の年輩の日本人が思いがけずネパール語を話すことに対する「若干の驚き」を感じ「親近感」を持ってくれたからであらう。それで何ら疑うこともなく、ラム君と約束した長距離バスの発着ターミナルに深夜12時の5分前に来て、彼が仕事場から来てくれるのを待っていた。だが12時を30分過ぎても彼は現れない。仕事の段取りで遅くなるのだろうと、さらに半時間近く待ち続けた。ペナンからクアランプールなどマレーシア各地に向かう深夜長距離バスの出発が一段落して、長距離バス発着所の人混みが嘘のように閑散となった午前1時過ぎになっても、彼はまだ現れない。さすがにこれは彼に騙されたと諦めて、近くで客待ちをしていたタクシーを拾って、B-Suite Hotelへ引き返したのである。

タクシーに乗りながら、そしてホテルの部屋に戻ってからも、ラム・バハドール・ライが約束を違えた原因を考えてみた。私のネパール人との長い交友経験から言えば、バフンやチェトリのアーリア系ネパール人は比較的簡単

に約束をし、簡単にそれを反故にするのと比べると、モンゴロイド系のマトワリ達は、お愛想で守れない約束は減多にしない。マトワリには日本人に骨格上よく似た同類意識に近いものがあり、日本人との約束を守る誠実さがあると自分は思い込んでいた。しかしよく考えれば、かの青年はまだ20歳で、そんな若者が男子といえども、その3倍以上の年寄りと友達になりたがるとは期待する方が無理なのであろう。彼はまだ日本人との交友体験が余りなかったのかもしれない。さらに人通りの多い昼間ならともかく、閑散とした場所での深夜の二人だけの密会なのである。私はあの短い時間内に自分の調査目的、調査の必要性を彼にゆっくり説明することが出来なかったことを後悔した。そのような私の意図を正確に理解できなかったために、彼はある種の「胡散臭さ」あるいは「未知、未経験の危険」を直感し、その場しのぎでいい加減な約束を私にしてしまったのであろう。そして仕事が終わると、そんな約束を反故にして従業員宿舎に直行して帰ったのであろう。私は、自分自身のネパール人の友達作りの容易さに慣れすぎ、孫のような年下の彼とのラポール形成を甘く考えすぎていたのだ。

<3月11日>

2011年のマレーシア調査は、ペナン出身のマレーシア人留学生、ジェームス（Lim Jit Sun）君に現地調査助手として助けてもらったが、今年彼は英国での修士課程留学を終えシンガポールの清水建設会社に就職したはずである。私のペナン行きの日程を知らせてあったので彼はシンガポールから長距離バスで5時間かけてペナンに来てくれたのである。そして、ペナン滞在中に、台湾大学の文化人類学大学院生のチェリー・リアンさんを私に引きあわせ、私の調査助手に推薦してくれたのである。勿論私は彼の申し出を受け入れ、彼女に調査助手として働いてもらうことを即決した。そのことを見届けると、彼はシンガポールの職場に帰っていったのである。

午後早速、チェリーさんを連れて調査に出かけた。私は、再度ホワイト・

コーヒー店に出かけてみた。この日は、店のボーイ達をいろいろ采配している主任らしい大物ネパール人を物色し、彼をこちらから逆指名してコーヒーを注文した。彼の名はクリシュナ・バハドール・グルンである。クリシュナ（ヒンドゥー教の一主神の名前）君は28歳の既婚者で、本国に妻と子供を残しての単身出稼ぎ者であった。このクリシュナ君とは短時間で何となくウマが合うような気がして、彼の勤務時間終了後に近くの食堂へ夕飯に誘い出す約束を取り付けた。

約束の午後6時を少々過ぎた頃、クリシュナ君はホワイト・コーヒーの裏通りにある中華食堂に来てくれた。我々は、簡単な食事を注文し、雑談から初めて彼のペナンでの生活について色々聞き取り調査を開始した。その内容は、去年の調査で聞き取りしたネパール人労働者のものと基本的に類似しており、何ら新奇なものではなかった。聞き取りが一段落した段階で、クリシュナ君はペナンに居住する多くのネパール人の「溜り場」に我々を誘ってくれた。そこはジョージタウンのキリスト教会近くの繁華街にある「ネパール食堂」だった。そこにはペナンに出稼ぎに来ているネパール人達が集まって故郷の味を楽しみながら昔話や情報交換に花を咲かせる場所である。クリシュナ君のおかげで、ここで私は3人のネパール人と知り合いになれたのである。

マレーシアでのネパール人出稼ぎ労働者の調査で一番難しいのは、調査時間の設定であろう。ネパール人労働者は夜8時、9時まで勤務せねばならず、それより後の夜間2、3時間しか調査時間が取れない。しかも私の滞在するホテルに来てもらうことは時間的に困難だから、彼らの職場付近の飲み屋、食堂で多くの他者の視線を気にしながらプライベートな聞き取りをしなければならない。一番望ましいのは、彼らの休日に私のホテルの自室に来てもらって聞き取りをする方法であるが、彼らにとっても日曜日（休日）は一週間分の下着や仕事着を洗濯し、宿泊所の掃除をする日でもある。しかも日曜ぐらいは彼らとて一週間分の蓄積した疲労を回復するために休養したいのであろう。だから彼らは日曜日を私の調査のために時間を割くことを嫌がる

のが通例であった。今回は、10日しかペナンに滞在できない私には、日曜日はたった一回しか巡ってこない。もし潤沢な調査資金があれば、彼らに一日分労賃をやるかわりに休日を取ってもらって、その日に調査時間を割いてもらうことであろう。しかしそうすることは、一人一日あたり300RMから500RMの「謝金」を払わねばなるまい。全インフォーマントに同額の謝金を用意するなら、たとえ30人でも9,000RM(27万円)から15,000RM(45万円)もの膨大な謝金が必要になる。残念なのは、人類学者のこのような調査方法の必要性やそれに伴う調査資金の使い方を科研費の審査官も大学の経理担当課も余りよくご存じない。人類学はフィールドワークに依存するために経費的にコスト高となる学問なのである。

<3月12日>

この日は、クリシュナ・バハドール・グルンの紹介で、友達のサタヤ・マン・ラマと親しくなった。ラマ君は、繁華街のモールにあるペナン・ホワイト・コーヒー店(ホワイト・コーヒー店とは別の喫茶店)で働いているネパール人である。彼のラマという家族姓は「マトワリ」に属するチベット系少数民族である。グルン君もラマ君もともに「マトワリ(酒飲みカースト)」で、彼ら二人を一緒に呼び出して食事をしながら、いろいろと聞き取りをした。クリシュナ君は、ヒンドゥー教主神の名前を貰っているだけに、自分がヒンドゥー教徒である意識があるが、当地ペナンでは日常的に牛肉も豚肉も拒食することはない。(しかしそんな彼でも、ネパールの故郷の村に帰ると、両親や親族の手前、絶対に牛も豚も食べることはないと断言する。)彼は、ペナンでも自費では酒を飲まないし、煙草も吸わない。それに対してチベット系のラマ君はヒンドゥー教徒ではなく、どちらかというとチベット仏教徒であるが、熱心なチベット仏教徒ではない。日本人の無宗教に近い感じである。

ラマ君は鶏は勿論のこと、牛肉や豚肉も大好きだし、ビールも煙草も人一倍好きだ。同じマトワリでも二人の食生活の趣向は異なっている。彼らの話

によると、以前はネパール人出稼ぎ労働者が仕事場のボスに気に入られれば十年近く継続してマレーシアで働くこともできたが、現在では殆どそんな長期滞在者はいないらしい。マレーシアのネパール人出稼ぎ者は平均3年契約で、現在ではそれ以上契約を延ばして滞在することは（経営者は望んでも）行政府が認めないらしい。その理由を探ってみたが、まだ確信はない。おそらくマレーシアにはここ数年ミャンマからの移住者が増加しており、そのことで当地のネパール人労働者の賃金抑制が続いている傾向があり、ネパール出身の出稼ぎ労働者総数が頭打ちになっているのではないかと推量している。この傾向は、非専門職分野では特に顕著であることが分かった。日本のように外国人非専門労働者の入国制限の厳しい国とは違って、マレーシアでは、外国人労働者同士の出身国別の競合状態が盛んになりつつあり、現地のニュースでは、工場などで、ネパール人とミャンマ人との間で集団的暴力事件も起こっている。以前はそうでもなかったが、最近は外国人労働者の就業機会の競争が激しくなり、異民族集団的に反発感情が目立っているらしい。

クリシュナ君自身も最初は日本へ来たかったが、身元保証人となってくれるような人のコネが探せず挫折して、それからマンパワー業者を通じてマレーシアへの出稼ぎにありついたのである。確かに現在の日本は、ハイテクの海外技術者には容易にワーキング・ヴィザを付与するが、ローテクや筋肉労働者には、非常に厳しい。この点で、お隣の韓国は異なる。韓国とネパールとは「EPS」という協定が結ばれており、毎年2千人を超えないネパール人労働者を受け入れている。（韓国は、ネパールだけでなくバングラデッシュなどの発展途上諸国とも同様の提携をしているようだ。）数年前、ポカラで韓国を回って日本で不法滞在して働いたネパール人の中年男性に出会ったことがあるが、彼はネパールから韓国へ働きに出て、その後、韓国から日本へ入国し不法滞在で仕事をしていたことを教えてくれた。韓国とネパールとの友好関係はだんだん強められている。ネパール政府の国家計画委員会（National Planning Committee）の委員であるネパール人役人によれば、最近

ネパールのカトマンドゥで地下鉄建設プロジェクトが計画され、建設工事の国際入札が行われた。勿論日本の大手企業も入札に参加したが、日欧米の企業を出し抜いて勝利したのは韓国の企業であった。この事実は、具体的な実働レベルでネパール政府関係者に韓国からの種々のアプローチがあったことを示唆しているだろう。インドでも東南アジアでも韓国製の電化商品の勢いが日本製品を駆逐しつつある現状は否めない。

< 3 月 13 日 >

今日は予定に空白が出来たので、以前訪れた記憶を頼りに、ジョージタウンの海沿いの道を探索しデジカメで色々写真を撮りながら散歩してみた。この海岸道の右手にあるコタ・ラマ公園や古い砲台が並んだコーンウォリス砦跡をぶらぶらし、さらに灯台あたりを右手に回ると左の海沿いに何本かの古い木造栈橋が並んでいる。そこが「ジェッティ」(Jetty: 栈橋集落)である。栈橋の先頭から陸地までの半分くらいに竹網やアンペラ壁の簡易家屋群がびっしり密集している。栈橋は道路の役割を果たしており、簡易家屋群は海の浅瀬に打ち込まれた丸木群によって支えられている。夕方頃、栈橋の先の方から釣竿とバケツを持った父子が家の方に引き上げて来るのに出会った。夕食の魚を釣ってきたのだろうか。家々には玄関も戸口もなく、栈橋を歩く通行人や観光客には家の中の様子がすっかり見透うせる。床の莫蔭の上に横たわってテレビを見ていたり、家族がご飯を食べていたりする風景が丸見えの開放性がある。家の中に涼風を招き入れるための工夫だろうし、近所には泥棒もいないからだだろう。この開放性は、ネパールの山道に並ぶ集落では見かけることはない。

このジェッティにはビルマ(ミャンマー)からの難民がたくさん住んでいる。長い間の軍事政権から民主化運動を成功させビルマを開放させたアウン・サン・スー・チーの登場は2010年であり、それまでの軍事的国家の閉鎖的な国内情勢を嫌って逃れてきたビルマ人達がマレー半島を横切ってペ

ナンに移住してきたビルマ人難民である。東洋英和女学院の石井香世子准教授によれば、ビルマからタイを通過してペナンへの移住者は現在でも脈々と続いているそうだ。（石井准教授にはまだ確認していないが、ビルマからマレーシアへのビルマ人の移動には、イスラム教という宗教性が絡んでいるのだろうか。）このジェッティのビルマ人達の間では、栈橋の通行人（外国人観光客は余り来ない）が頼めばビルマ料理を食べさせてくれる。木のテーブルと椅子が2、3個ずつ並んでいるだけで食堂とは言い難いし、運ばれてくる料理も家族の夕飯か客用のものか区別がつかない程、素朴である。前の海で釣っただろう魚をビルマ風に煮挙げた料理を楽しんだ。

< 3月14日 >

B-Suite Hotel のシャワーに改善の見込みがないので、ジョージタウンにある Victoria Inn に移動した。部屋の広さは三分の一となったが、調査地に近いからタクシー代の節約にはなる。TOFU-Café の経営者カップルの Low と Joyce の紹介で、ジョージタウンにある外国人労働者のマンパワー業者である「達権人力資源有限公司」社員の Janet さんを紹介してもらった。達権人力資源有限公司は、主にネパールとビルマからの外国人労働者を手配するマンパワー業者らしい。それで早速 Janet さんの会社を訪問した。そこで、Janet さんと彼女の上司の Edward Kok Wen Huang 氏から話を聞くと、同社は、単にネパールやミャンマからマレーシアに出稼ぎに来る労働者を受身的に待っているだけでなく、同社側から積極的にネパールやミャンマに出向いて質の良いネパール人、ミャンマ人労働者をスカウトすることも実行するマンパワー企業として興味深かった。

Janet さんは、退社時間後、ネパール人労働者の仕事場の一つとしてジョージタウンからペナン大橋を渡っての本土側バタワースにある廃品処理現場に私を連れていってくれた。その廃品処理工場は、人家がまったくなく、方々にパーム林が並んでいるだけの非常に寂れたところにあった。そこでは3人

のネパール人が働いていた。その廃品処理場の敷地には、彼らのみが使用する自炊部屋付の寄宿舎が建てられていたが、それは被災地によく見られる避難小屋のような簡易建築物である。隣接する廃品の山々を前に3人はゆっくりとしたペースで仕事をしていた。彼らはネパールで中学を中退してマレーシアへ出稼ぎに出てきた。最長者はマレーシアに来て10年にもなるが、まだ一度もネパールへ帰ったことがない。ひょっとしたら二度と故郷へ帰るあてがないのかもしれない。

この廃品回収工場は、「塀のない刑務所」という感じがした。もちろん、このような場所では英語を話す必要性はまったくない。つまり、ネパール人労働者でもある程度英語で接客能力がある者と、そうでない者とは労働の種類に極端な格差が出てくる。前者は、ジョージタウンの繁華街のビル内で華やかな売場に職を持てるが、後者は人里離れた疎開地の塀のない刑務所のような所で味気ない単調な作業に従事しなければならない。その格差を具体的に見せてくれるため、Janetさんは、自主的に判断して、ここに一時間近く自分で車を運転して私を連れてきてくれたのであろう。

<3月15日>

今日も達権人力資源有限公司にお邪魔した。Janetさんは、店で私の来るのを待っていてくれたように、ネパール語のデヴァナガリ文字を使用した英会話教科書とビルマ文字で書かれたビルマ人用の英会話教科書を一冊ずつ「小生のお土産に」とくれたのである。昨日もそうだったが、今日も仕事が多忙で忙しい素振りがなかったので、貰った教科書をめくりながら、色々尋ねてみた。そうすると、嫌な顔をまったくせずにJanetさんがすぐに答えてくれた。これらの教科書は、マレーシアに来るネパール人やビルマ人の希望者に配布し、希望者の英会話特訓講座の教科書として使用されるとのことである。そんな英会話講座は、労働者からは授業料を一切取らずに、出稼ぎ労働者としてマレーシア社会に適応する能力を向上させるために彼らに非

営利活動として提供しているものであると聞いて、いたく驚いた。恐らくこのような慈善事業は、それを通じて宣伝効果を発揮し、長期的には、自社を頼ってくるネパール人やビルマ人の入植者の数が増加することを狙っているものと思われた。この有限公司の上司の話は、明瞭な断定的な表明ではなかったが、同種のマンパワー企業が増えてきており、近い将来は出稼ぎ労働者確保の企業競争に突入する時代が来ることを予期した準備活動であろうと受け取れた。マレーシアの外国人労働者は人手不足で猫の手も借りたい以前の状況とは異なって、現在では、質の良い外国人労働者を確保するため数量的制限をしてリクルートする傾向が始まっているようだ。達権人力資源有限公司は、企業競争到来を意識して、このような教育的慈善事業を開始したのであろう。

この達権人力資源有限公司があるフロアーの北側半分には、恐らくビルマ人が経営するビルマ人用の日用雑貨、食料品や衣料品を売る店が30軒近く並んでいる。商品の正札には見覚えがあるビルマ文字が書かれている。だから商店主もビルマ人に違いないと思った私は、昔習ったなけなしのビルマ語で「Nekambade, kanya? (How are you, sir?)」と挨拶すると、彼らもビルマ語で「Nekanbade, Chezuchindabe!」(I'm fine, thanks!)、と答え微笑してくれたのである。もっと話をしたかったが、私のビルマ語はそこまでだし、マレー語もまったく分からない。彼らも英語はまったくわからない。結局、旧約聖書にある「バベルの塔」の悲劇を思いしらされた次第であった。

この建物内にこれだけ多くのビルマ商店群が揃っているなら、かなりの人数のビルマ人移住者がペナンに存在するのだろうか。もしそうなら、ペナン周辺には、どこかにビルマ人居住区やビルマ仏教寺もあるに違いないと思えてきた。その点を達権人力資源有限公司のHuang氏やJanet嬢に尋ねて、そのビルマ街に連れて行ってもらいたいと思ったが、残念ながらその機会を逸してしまった。次回の出張では、重点的に調査してみたい。

< 3月17日 >

朝9時過ぎに出発準備を整えて Victoria Inn のロビーで待っていると、運転手のリムさんがタクシーで迎えに来てくれ、ペナン空港に運んでくれた。その後は、ペナンからシンガポールまで飛び、そこで10時間近くトランジット待機後、やっと関西国際空港行の飛行機が離陸したのは、真夜中を過ぎていた。

今回の調査旅行を終えた最初の実感、歩き回るフィールドワークに対する年齢的な限界に自分が向っていることの発見である。これは、日本にいる時よりも外国に出ている時の方が、若返った気分になるのが常であった自分とり、忌々しいことである。今後は、フィールドワークをする際の準備段階で簡便に使える交通手段の確保が今まで以上に重要となろう。とりわけ文化人類学的フィールドワークでは、「スノウ・ボーリング（雪ダルマ）方式」（面接したインフォーマントから次に面接するインフォーマントを紹介してもらう方法で、次々に調査対象のインフォーマントの数を増やしていく調査方法）が必須である。しかも、雪ダルマ方式で次々にインフォーマントを紹介してもらった上で、それぞれのインフォーマントとは実質的な聞き取りに入る前に、ある程度は適切な「ラポール」（調査実行上必要な調査者とインフォーマントとの間の信頼関係）を構築する準備時間も捻出しなければならない。それなのに、インフォーマントが日中は勤務時間で拘束されている出稼ぎ労働者ばかりだから彼らに動いてもらうわけにはいかない。こちらから彼らの指定する場所まで希望通りの時間に移動する必要上、移動手段の確保は調査成功には必須である。

今回の調査では、ネパール人青年の海外出稼ぎ労働の需要供給の調整機関として、元グルカ兵によるマンパワー業者がネパールにあることを確認したことと、マレーシアにも同種のマンパワー業者がああって、両者間に業界内の「棲み分け的な協業関係」があり、ネパール業者側は、ネパール労働者の送り出しを専ら担当し、それと提携するマレーシア側業者が実際の現地企業

配分を担当するのである。また、この両者の企業的協業関係も、大きな時代の流れに制約されていることも分かった。つまり、ネパール側では、これまで労働者の送り込み先が距離的に近いマレーシアを重視してきたが、現在では中東方面（カタール、サウジアラビア、オマーン、イエーメン等）への送り出しを重視する方向に変化している。マレーシアでの給料より中東での給料の方が遥かに高いことが、この趨勢の変化を作り出しているようである。

今回の調査の成果は、(1) マレーシアのネパール人労働者の需給調整に見る元グルカ兵マンパワー業者の実態、(2) それに対するミャンマ人労働者との確執問題などが挙げられよう。次年度の調査では、これらの問題点をさらに深く究明したい。

参考文献

- 山本勇次 (1997) 「多民族国家ネパールの国家形成とナショナリズムの特質—中西部の都市ボカラに見る“ネパール化”の玻行現象— (1)」『国際研究論叢』 11-1 : 1-14.
- 「多民族国家ネパールの国家形成とナショナリズムの特質—中西部の都市ボカラに見る“ネパール化”の玻行現象— (2)」『国際研究論叢』 11-3 : 1-20.
- (1998) 「中産階層の“競争エートス”の未成熟と貧困層の拡大—ネパールの観光都市ボカラはなぜ貧しくなるのか—」江口信清 (編) 『『貧困の文化』再考』 (立命館大学人文科学研究所研究叢書 10) 有斐閣、271-321.
- (2000) 「ネパールの民主化到来とスクンバシ集落の形成と発展—ボカラ市のスラムの自生的リーダーとコムニタス運動—」山本勇次 (編) 『スラム地区住民の適応に関する比較研究』 (平成 10・11 年度文部科学省科学研究補助金研究成果報告書) 大阪国際大学.
- (2004) 「ヒンドゥー教と共産主義のイデオロギー葛藤—ネパールの多政党民主主義時代の政治的混迷—」『立命館大学人文科学研究所紀要』 83 : 71-114.
- (2008) 「ネパールのカースト社会における観光産業と社会的弱者—観光都市ボカラの発展と少数民族タカリの健闘—」『立命館大学人文科学研究所紀要』 91:99-170.
- Yuji Yamamoto (1983) 'Inter-caste Marriages in Pokhara: Sanskritization or Urbanization', 『アジア・アフリカ言語文化研究』 25: pp.1-38.
- (2012) 'Preliminary Research on Nepalese Immigrant Workers in Penang: Gurkha Veterans' Connection for Oversea Nepalese Workers', *Journal of Ritsumeikan Social and Humanities* 4: pp.53-78.

